

「すべては自分」と受けとめ、 感謝の心を忘れない。

新宿教会 高木身 and さん

高木身 and さんは、夫との関係に悩んでいた。長年運送会社に勤務する夫は、手首の骨を損傷し仕事ができなくなってしまったことから自暴自棄に陥り、家庭は重苦しい雰囲気覆われていた。そんな折り、親身に相談に乗ってくれる人から、夫の言うことは否定せず「はい」と返事をするようアドバイスを受けた。しかし、仕事もせず昼から酒を飲む夫に対しては返事してもきつい口調になってしまい、夫婦関係はさらに悪化。再び先の人に相談すると、「ほんの小さな米粒ほどであったとしても、ご主人を否定する気持ちはないかしら」と諭された。凶星だった。身 and さんは「夫を変えようとするのではなく、『すべては自分』と受けとめ、いまの生活のなかで思いやりや感謝の心をもつことが大事」と心を改めた。その後、夫は手首の状態も良くなり、新たな運送会社に就職。重い荷物を運搬する仕事はきついに違いないが、そこに生きがいを感じていることは、帰宅後の明るい表情を見てわかる。夫との関係のなかで多くの気づきを得た身 and さんは、「起こるさまざまなきことに動じず、感謝の心を忘れない」と心のなかで反芻し、いま、迷いなく生きている。



相手を認め、讃える

ふつう私たちは、成績がいいとか、仕事が早いとか、性格がいいとか、運動に長けているといった長所を指して「すぐれている」といい、その人を認め、讃えます。ところが「積尊は、自分の生命を奪おうとした提婆達多を「善知識」と讃え、殺人鬼と恐れられた鵲掘魔（アングリマラー）の再生を信じ認めて、弟子の一人に加えたといわれます。世間の常識とは異なる見方もありませんが、ここには、人を認め、讃えるときの大切な着眼点が表示されています。

一般でいう「贊嘆」は「深く感心してほめること」を意味します。この見方に立つと、自分を殺そうとした人を讃えることは、まずあり得ません。いっぽう仏教でいう「讚歎」は「一仏・菩薩の徳をほめ讃えること」と教えています。そのことに照らせば、積尊がどれほど罪深い人に対しても讃えることを忘れたのは、相手に仏・菩薩の徳の輝きを見ていたからにはかなりません。ただ実際には、なかなかそこまで気づけません。それでも、たとえば親が子を見るとき、上司が部下を評価するとき、あるいは友だちとふれあうときに、相手のすぐれたところを見る心がけとともに、私たちはお互いさま、本来、仏・菩薩の徳を本具する「いのち」であるということをお忘れはならないと思います。